白拍子日記　下

ル 3
3743
2

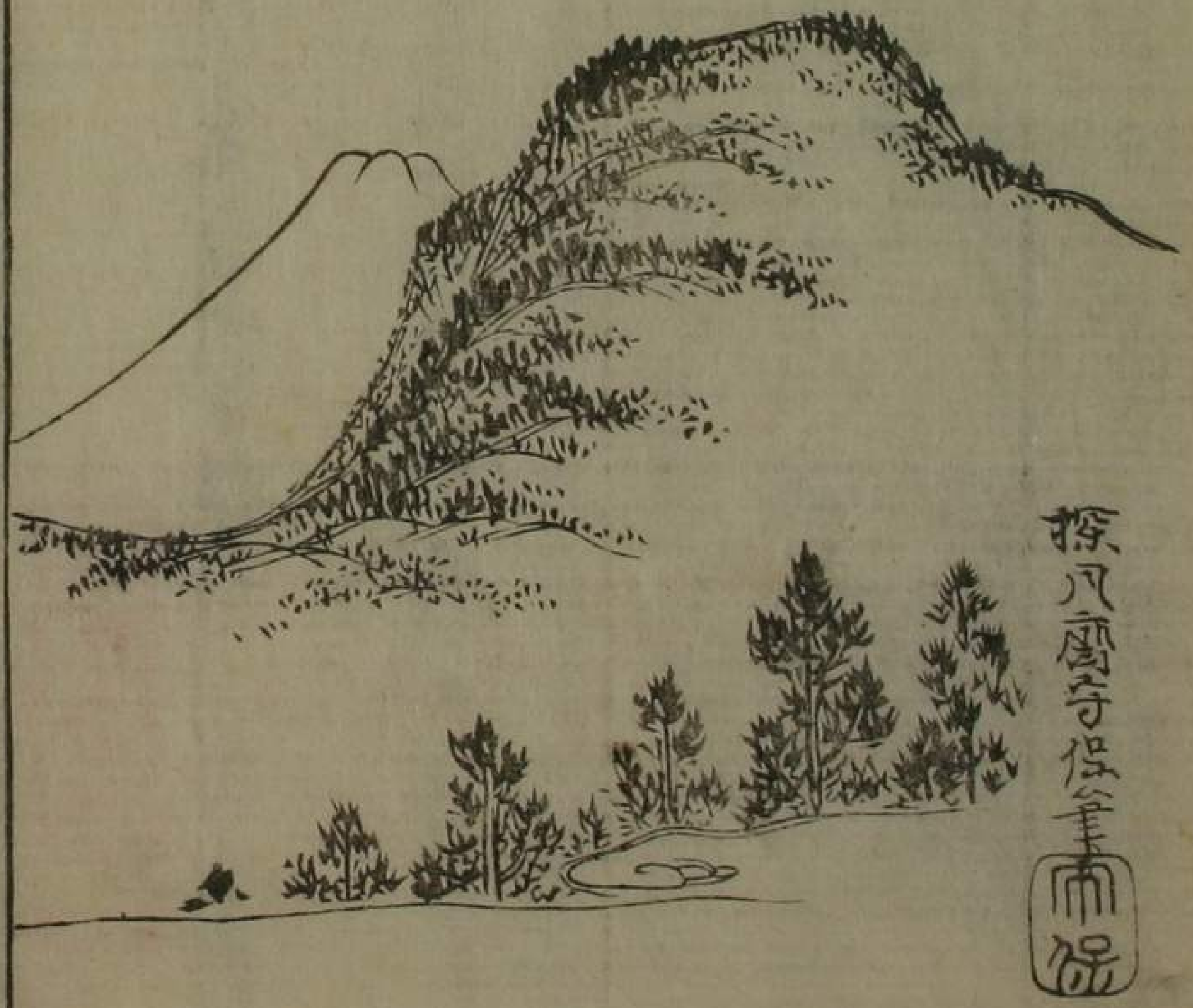
ふし日記下

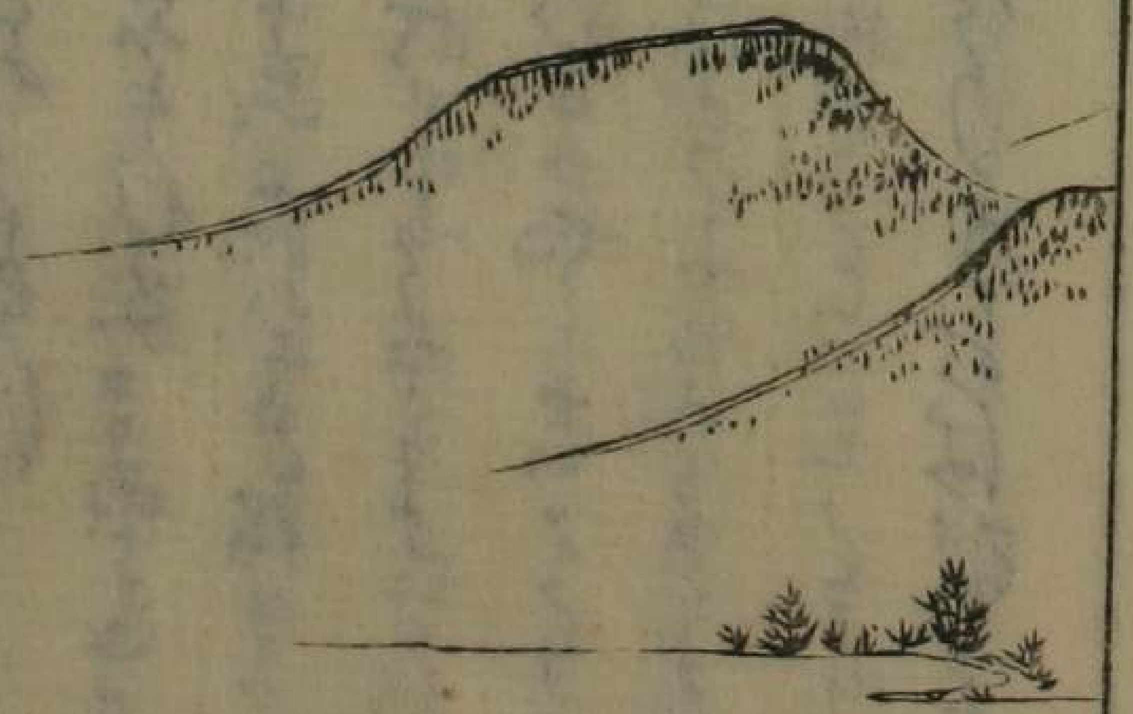
廿六日程ヶ谷のところを暁六ツを發たしゝて藤沢
より

あけゆく比時雨風いてのはら神の社さへかへりさなん
雨はらひせる松の陰のかちさへかけくのちのおもてに江の島
なをゆめちにかよひてるらぬ雲の霧山おほくの中見ゆ
雨晴ふくあらたらおろし大磯の宿より第二のみちにかゝる
山井の宿ありしいふ
箱根ちかくの山中に水清くやむまなしあらねなとあり
峠にかゝるをいよく山風吹しまきてなまかくしほたく

門 ル 3
號 3743
巻 2

F 41- 6963


探円斎守保筆



谷々ふおちかゝぬへまきハ下総をとも八郎とゆふあきらて
うち継ぬめやうのそらみさはかゝたるとゆらぬ病みて
三嶽ようふうく流ゝされてあり来流
箱根路のきゝのみちら風さえてふみなわぬる月のそら
浪ちの床ふ来て世の夢ハいかし十六日ニハ箱根の里ふ
なりしとはふもちふかぬ旦ハそのみくよふなりまゐらしハ
まゐらせりなりといひあへつか年の冬ゝせちをまちて
海らしにみるいさきかのとまつらふかなりて又に
いふへきことも能くしつくならめこゝうちをまり
附るふるさとゝおもハれたりけるはかれもら哉

さかりとこそきこえておもれのゝ四月はのちのみちしるよ
なるらんあやし
足引の山路をこえ花をみれともしらぬところのをち
出日みあしくとくさん出して
そこれ山あくれハ雪をあらはれてちらかゝやくまとみしら雪
大ちふ雪をかゝやく雨この根ハきゝうま雑布のちらふたりけん
あし此海のなまきふなからなみ浪み子くも松の森とくへし
せまぬさゆまハそを能く権現の社也とおもひとこの本宮
よりこえの海にて見ゆるけきことちらわりさそて
はるくとちゆく坂をみちたかのあやしくたちまなり

箱根山大形出て坂路まて行さいしてあら峠松
ちは雲ちら沖のゆえん二子山おもひろん世界おもしろ小田原
そこ松坂ひう みまう宮前しまうあるもの在うは谷川の水
畑とかさころもなく深あって〆まはなし小おとらん湯坂
ちかきる殊織徒とも小田原より宿屋に於いてすけ
さるとてそのゆくての茶屋ともに多しとは形ちし
よりかくあとさきましおまちのう宿するしとそかゆきてよく
みなもつきしあそのとどまり湯本ハはこね温泉七所
のうちなりといふまへりまてまのくも湯あまたよし
けり湯屋のまへまちに志たらひろきまちをはのり

形し 其村は都う小田原より先く石橋山ハ頼朝のいくさ
より一里はかり西北にありといふ
其より日和よきおり大磯なり小田原よりこちて新
酒匂也越てまさき宮の川をさとぞふ
大磯も小田原も相州なれど松のたちつゞきたる所ニ大なりうつ
大しまの沖より遠る富士はたかきの影ふ見えてさて又れ
又やしましてあまた出ていつかきのきへしハ松のしまよい鎌
其宮居は波宮よりかうかうまいりて清見とて鎌倉名所
鶴ヶ岡八幡宮ハ其まつり清
ふるくとよりはあさひてと鶴ヶ岡の五社の鳥居ふたつの石橋わたれ

永きよのとほつみおやの御塚ハ社のたゝよりあつらてちらき
所也とそくえちうみのはいきて所ゝもえらんひふうこれ
おつきふものして田井そちまち見のしまたとめてそり
なかくなんめくなへしともちかきくおく
廿七日雨ふるこえひそちとまりハ川流えてあまそれ江戸
まう道はくつまれ人くし杉ぬしきくらさよつてわり
さそもちらひとひうきすまて雲のゝふれ気のいち
たくくみちめくらちこゝしあり
廿八日はけふも雨やまずて玉川にはふしやうえておれハ
ひとりきくとちて田町の大坂屋にやどりともまちての

くるゝ比淡路屋の銭屋宿陳として見れ日所にやとり
廿九日七つはまたれハかの本営本陣のまへよりてこゝろち
まうるへきちらみてゆくりなく井上氏ふあくりかれハいかし
友どちはじめ離れ人の住まひもをしまれハまたの村おのれ
そよりハ下野のひ城そのてあるやかや城とふかいひ
なかうちちかまりにけりつもしふあくりあくるまゝに
うつたゝあからぬこちしてかきられくよろこひあくりもん
かきしろやとりふところにてこゝのうち城きくにかの地の
とら行てひふ首て路庵へこゝろつまゝと出来てとの
せしときいちはらのきとつらめそさふともすたにみやこくのなる

つとめていよ〳〵よろこふけれハこゝろまかり錦の丸へ出まし
又ゝおのれもうちつれゆきてさるへき所にてあそふめくり
かつもハ海江田盛時といひける上臈とも寺島
のちはゆかりせさせてつかへまつりしを那しきの月花
池の井角田ふさ茶屋とその所にもしとうりて
さけをむかへてにきはゝのあそびとなりけり
○花もちて婦女かたしてあそふ日ハ柳さくらもさかりのにはの池
そのてり清きそのあたりまであつまりてきてみる河の辺
なる青柳とらぬ勝にあそふまくちのくひきまつらふる
あしもとさすまじき事のそしなるをやめてこの図あらはして

めつらしきをかしきむかしのきゝくらへしはせとふるきの
たふきからにある此姫出まして今の名ふよる歌を
とつうふ
○林人のこゝろ哉ときゝてなかひくしまゝかれらの青柳の糸
けふハみてまし後ひの日をまれハみやこのことも空もあまねひて、
○おもひをきや都をみれてみやこなるあそふ清ふことまさせんとハ
かくてさかつきのあふれときのたのしみ有てそこの処へとよし京
みやこるふふあそひんとそことの浜ふ
みやこなるとまふこつれて老ふわかもおし〳〵さそてなるあそひまくらふ
七月朔日高圓の浜にもえまふ二別様ふ新まし後の世子へ

りて給よみ序かきてこゝろにまかせてものし給
○きのふ子らに閑叟の大人し越かきてそなたに祝ひうたよみ
○あなたもおもふことふみやとをるうわきさせるもあそぶなぶ
○をとこ水の友なられねもをさへあ見くけふのねてハめぐりあひて
との日折くれのこられハおのかしひとりそのれて松園古香
越付ふことまのそてをいひしむりしとなみやこ雲井に
て源りしくまかりし〳〵なるハまたおみさとぞ
こゝちのくのおのつからたまふ侍をもしてわするゝひろ
おもぶさて時をしたりしぬ
二日故村田春海がもとにて山田文伯和泉井某なり

はじめて訪ひ来春海ハ喜海といふ子なる銭屋に聞の歌を
このませてひとりおもひ侍るおりあって家くこゝろ越用ひ
けりとあれバかしこの枕をおのがかくへせうこそせしこゝちゝ
し侍りこのとし月のつもりしときくにぞくちをしき
さてかのめし出のものたえによみてあめし歌とこの中
よりよみてかきつけ越えてしにてもせむかたさまほゝ知れハ
それしそうひてたまうらん天なりきくハいとはかりよろこひ
侍り斜あそびてもたつきへまゐるしてとせちゞに
いふたりけはたえたてまつりおくのこゝろなきみぎハにやらるて
ゆき折子ものまとしとこゝ事のひおもさぬ

七日月のち頭まハたゝふやハあまつきとて文月この二夜楼
上に杉ふ中杉沈深大久保甲東浦江田盛時井上老秋中井
桜洲なと外ともここ集られまし月の江の外乃緒地に
上る二八真ふ会てさのつきとりく〳〵〳〵まうとも

初秋月　　沈深

てる月の秋たつゝうく生まゝそ秋たつらぬあきの初風

ちるみさ川まる初秋の月みるになかの秋ともふらひくらん

むさしのゝ花ろちらぬ秋のゆゑもまゐりみゆる月の秋哉　　花紀

○天の河ほしのあふせふきみ初てこき秋の夜ふかき月のかけうつ

名所猿

○みやこなとおに住八角田川なこみつきわけもみゆるさるのなく声

送八田公務帰京　　甲東

曽期後会杳無期　何料重逢若一危　却恨墨江之上月　清光此夜照離思

○一代風流出不孤　東都千里思難量　江秋月　　盛時

遠岑雪収拾嚢米解珠

関東覇業漠然跡　唯有詩歌存古風偶然書　　桜洲

詠墨江月人々集青楼　秋多井

九日築地の小田原町に宿を易しハ桜深かやとりてあれハ
うてしきよひとよろしとくれハのかゝらすこゝろにく
まかせたる船へくたしもみやこのたよりありて猶深李連
かたらひけり

○ふるの松のうへかゝやくよそほのみのひかりも城おもひこそれ
十日有信なる楼某氏何かあつまりしハけふなくあそしなれハと
みちもゆくゑもしらねて消息せしこともあり亦をなし
いそうるさひてよろ染ねたところ船り外に借用図人独楽
某長浅なる何氏の二人来あひて野寺のかきものゝかゆ

みかけそかり
十二日墨板橋のたなかたるに傑ある家かし城詞ニ古香ヶ友
にて歌よむ人集れ来て清きる世もの(し)たりけり
よろこひて松の花桃かけにゆゝめくの号城越船
楼よりつ見ハそ遊ひたありし　遠城をあらす
さきしまの遊むらさきの中の流城出てるよそ百余ヵ
とらへるる古香
すゝみかきこゝ捕　君のきらせるハこの高楼の夕より出すや
みこの集ぬきしめもうとて
大まよみのおもしろきこの遊ひきハあらまし井にあらぬ船

大曾井上文雄をと読ことしき契のまゝにものしつ　おもひきと
いつとはなしに世のみちの事ともたる老人ともいひてこれもこゝろに
いふらし清香翁のちかのこゝろへの此すぢとものくれ
よしはかうち書いてやゝことく添へるところに書し
七十路のわきのうちかさねていよゝしかの人といつれよ
文ちのこころよあらしめて
うはらのよりおらしきて師霊翁抄のこと半隠の室
のれてきこ夜ひしみそかも出来てたまくともあらるか
なのめり
嘉永はへのとし中のみなつき角田川月のほとりにしるす　思ふ

さてこの此かたひのねがふことのねきからんとの考定ちかよき説
いかにぞ識事の名のちあなしところおち
たるものの所
十首白那ちし出し文稿老翠書賢篤くつ尚賢にて春緒
なきこ子たなかと下さてあのこゝのかねのおもれ出殖
ともあてて君海の家にみえされて事緒まて三代緒之
すいきのめしなのみよか本緒つき人もあたれ八
出辺氏ら方つちの納めおきこちとそてあまりの冊子とも目録
こそしもて事おり中に八ふねのあらやさとり自家
草稿共もあつてこまて世に二那きと宝たる紙々のしも

まをしくみふれてうたゝかれまうすはなの下 あたりに
きくわれて入滝の藤とも六條寫をもとめまゐらせまうしに
ちかくらくかりてんやとら六や二てまゐらてまうし給ひて候
はつみやこのさくらのえし法ら守へし
十六日八重の山色氏にいひまゐらせそてまゐらせ河内殿より
さる八やのてわかきのおもむきほうのこいまゐらせ丹波まし
て法ら田舎の西へ城めくりてはるゝく見物さらのかる
たのしき藤子ら京経はあまゝひとまゐらせかねつきとゝち
しつてひらはなのみやまのよとところの梅そのかりて
酒ともあるまじ書画かきまゐらせぬ事をすゝむれよ

北たゝ其七草見んとての一かくこひのゝちへあゆみてと
あるかきかれとらもいまの城さかりとさまへみへれぬる
をまゐらする家はうちいかたくのあやめあやめのこる
庭のくさにゆきめくりたまへあの山へあそひにやまて
ところかなりけり
八くの若草まゐらする心はひまなきに新宿のき八部こゝち
そをこのり梅若の塚向嶋なのとうふあるゝかの城見めくりて
又ふねふのるゝその法にさくらのたのみ木かまゐりなく
見くわつてはるゝその水まへひおもひやりてもあま
りあるへし

さみた河てるみる橋のせんのかさん香やまちわたらん
さかるこのところは世のあかさまみまゐりてみるたりくれ
まゐるかと永代の大橋をさるて川さかふつかれるかと
つきこよひの月山のはなちらてさし出たり
むさしの海大江のみなと船つけて須ふいさよふ月ちかひ乱
れかうさこよひの月は名は八や手のはそろきし まことに深
なかんみこよひしくかなところまてはめてこのそらめ
をかうしとあやしきまてに おもゆ
十七日は六古香中條回弁某なと心をあはひてれんの舟
あそひせんのあらましせし我小はかし小船のたしあと

きのふ人々と八観深と共に橋須にわたりこのやとりに
くまなくて橋よりふしさるかたみえて おもひのほか
みなきのあとなし
よもはまの遊にわたり波も深ははりてらす手八月のうち雪さえか
ちりて この年の秋は空より思ひの人への影して ちらしとは
まなれ こたち つきて千本園のさの ひと つ もみ えけるの
みなはひんもろし の上海かたまもとまゝし おもしろさを
舟んつふ
十八日 冥田清孫 誘ひまたきもひんうし みなそれそのまのの
せんとて はやくみやこ地ゆきてちるまてまてまかし哉

やまひにおかされてこゝろよからずとてまかりけれども
さてちのこころざしのほどをいとはるゝ坤友なる猫丸
某のこゝろにつげまゐらせしよしとてかくれたるハ
やまのうへに位をきあてにけるのみこそあやしきことのかぎりなれ
昔見たりしそのたゞよりあまて般若木の珠おちくるよし
きこゆることのかれせるにおもひはいつもさらん罪なき児
おさなきものゝ命おもひやりにかなしくも身のうへにはいは
んかたなし
心ありし人の山のやまひそへにけるもしる悲鉢さらん
古くひ某のこゝろひに味方なるおもひの人ここにの病院に

いかでこと國へもちのまゝにかなふるにおそろしきかな故由
代清高が本の子某いふところのやみくらしみけるかゝるは見
なる猫なりつるよし七四歳にあまりたるハとて追福のため
京にとゞまりておくり経々んとに昔の事どもはひたさらぬかおの礼
あまたゆきふみもらしたかく侍らんとおもひかならず猫丸
さておのゝきてくるしみてもしくいひうつたへけるにやその
かいはひぎりくおくらぬ
なきものもころやまあへよ大君の御代ハ昔の世までくちぬ
女百亜國の医師バラーといふもの此あたりにちかくまゐりて佐白
寺に隠居すあれいまはおきてかれハいそし此医家さまの

日本国ちよく済のひよく国とものゝ書し八さま〳〵のを
とひ、ころんまり西洋天文の説ま済まして家伝典の
古伝説日非のみかな悦しよかして代々の盛衰或ハて
日本の代代かくは述ぬることなきを一まり出とも(て)つん揚
今日ハその年ハあまたのおんまゐりてかくのひなへしと
いへり
廿二日己酉ちまきたうへ渡バラー試ひ来かりさて貨
回の年ハ迷かに解しうきことをあれハむちふ
たゝくせんとておよそさくの出ともまて来ておくかり
かくてさまゝ日こまでしかり來し　おまき清様日非の

みいはれのことやうやくひらきたるゆへ此日本国ハ終り
あめりか人ハかれの国よりのすゝめへ消息して取んとらる天日
を指もとるにてなかる故て非あまつり球しるや否やを
いひつかはしけるよし をかへるところゆきとて病院
廿三日在非良菜のあゐしてて病院ふまのしるゆかおのれ
はものの情あいとみあめりかれハ米国医師スイドルといふもの
ふあひてくのはせこふすちは深き病ふあらせてもとよ
りえとやうすを八清れふ薬を用ゆるふ及ハさるよし
をいひこの日中村某卦何ふこれも逐一まてるの試育ひ
清国ともやいゆつきるいてうめれハ本きのうちめるをとるう

ふくれのしらぬ遊ぶにつきせぬ流れて此の世をとはとも
いはん
みるくもおたのしきやうすにやるやうすにおもしろきやうす
共八日来所はのり船に引る桜海の横浜の伏見にもありて
其八さまにねこゑんにて伸にて来てあかるけれしもこれ
ましつふみの来て
美君遊路路已騰宣識明朝連泥花楼港下
居僅数日満篋風月又天維
とうしていのさびしさもおもひちりにせんてもおもひなきく
ものうくやありけり

おまえ打ち合のあみつくしお結のたまものかはらぬこそまれ　鋭深
よまむの宮路の川風身にしめてとまふきしもおもひいつらん　香紀
あまくら六都の市に来鉄なるのあて　あつまの古鉄忘れやかれん
たまとふくさめおくめかさておのれもくらかくる道に伊勢
尾張のあいかよひ後河行かまへてお気知れる人に語き
みなかまひらきてたちてすかなんとちよきおまさ流産ハいま
ころハけふあまつと結かなんもあるへきれハかくうころ
打ちまて行たうしきのよし蛙にかかつらハせて

ひろき海にはたらく事あれバ空しからぬよふにとて地球をめぐらん
さてさるひの船ハ皮蒸気法をはじめとなれバ英國人
より借入ありしものを法のさくハさらなりまた紅毛阿度
亜國人までのかくみてゆくなかにもわれらの蒸気船まで
名をアルビヨンといひ船将をアイランドといひ日本と度の合ひ
事しもあつてかの國のものにて多數又思ふところのなかにて
飯もなきよふにてあらねどバウトルなどいふその跡をうつしてこゝろ
品をそろへたるもあらねて家ともいふところなるにあちらこちらの
来たるもの中にやまと細法ふもあれハなかなかの物語にも
しておもしろきほどにはなかなかの地球のことみてしる

此外外國にもあまたあれど愛人は國々ハ少なかならずしもおおきく
わがはかりがたし いかなれの國にても能くとらぬ
その國の人にかきわたりてその地球と共に見えてたのしみれ
紅毛人ガラタマトいふもの医師なれバ都も書つけあるそれ
さまなれハそのよふに英語をよく読むものかともかくの人のといふなる
英語ハドイデチルといへハみれ人後をとかくて日本に文漢字を
しはやくよくいへハいとおほくのかはれるハ其國の文字
をのこさずかきて人の國の文字ははかにれハ其くわしきもの
ちらたきとて知るけしきもなく日本人ハかしこくしてい
漢字をしらぬハなくてちらあるを知るもありとしてきへ

国々でちかうとくてなはしらぬもあるをはつるとさ繋き
哉この外国人とものうらふみとおもひともそ伴なひ
海をこの波ありとふ也

冬のうみ志のみより吹ちられて波ふりくるかしは蓬心

銀深 記

船ありしにたとへふ舟山みれハ天外海ゆくくちらされ
蕃五日路はおもひよるへきあれぬ舟まちかひなしやけれ
と夜のふあゆくまに雨ふり出風ありくろしあらしふ
あらひてかたとをのはまてあまきやうまれハ日のして

おほかたの人さえみれものとなくはなて死ぬはなのかり
かなみくらのくわくろしとあへれハわかなく船哉とあて
あくろ哉まつれやとこのくにいのちまふ風ふかれあれて
いのちある国ふうたくよろこひれんとあや、ふまのかまに
大きさみれおもえみ実のふれるものハ波路まもとなるるの部
あのにはきはわか恋為哉たつるおときさゆるふ人くよみ
うくりよろこひあつるるまかきかれて八雨とはきし風も
なおきるるんと忘れ八部屋さらはひ出てよくとまかり
しくころ哉きけハ紀の国の大湊よりおよそ数千里沖
なかとのさはまつたにあやうき命あやうきといまの

人々は浜ふ出ておもふなりゆきやうくにあけたるを
見るわれ先うち乗込しまなことはのぐくえゆるやうに頼を
頼み浜に出し紀のみなとより遠さまふたるのはつき
して其の夜くはあけし球風船あまりれハ近辺此近
なる兵庫とうみところに復迄出帆おろす帆人まうはやをを
西宮やまねハ帆船ふとまるまり
さはらのうまみ走のきて来る船を見きくわふる波の音の乱れ
船そこのこむとふおろし安心ふころ来るかまの川波
八月二日船とく御座て鉄座かもまふ川れるの人々はよくよ
来るありやうり也り肥前の大隈甚八ち縁の判府事

なる鉄船にていうちとまりてともなも浜まちし内々ちるん
はあてこのやうらえて表しくかのうふ外国のことに
かの大きのうらかのあく浜にあり行し浜と大きくく立
はふ出てもと至急やまきまくるら浜おかる事れ
らめものこの事とて行もところ船足ハよろこひ了り
たく浜てよりあつまる
惠みし船浜とふ船とのこまくともさやうなる人ゆるゆ日の新ぶ
三日大坂へいうけ其ハ軍艦にていとはやかりとは加賀の
まふ川尻ふ浜きぬるの船ハちかころ外国より買こん
とられるにて浜ねくまも友将軍ふ料ふて船へられ

たすかりけり

みなくいそく中に入舟は射あけてのけしき船ははやしらされし

こゝ團のたちより久保田してそれくむふり枝の幸山

ちかつきてむかしきみの子氏おも稚も波らふきちらの幸ふ

いとあひてもなからしき乳母のあらねはあらしまや家

末のゆくゑこそ今橋のもとなる平野屋に法きぬ

買ひしはの天満宮の前に大橋辺にまゐるまゝの蘭

田川をおもいいてゝ

山そへて家をたゝきたなふに河ものあつまりやうに

六日ゆくりたつく故熊谷妻あるあさるハ此

平野屋のあるし八兵衛もしつそくあれハよろこひの手ひ

きゝきゝてとりあつかひもよせしにてつまれる人もやみて

このお志にまよひしてあわれハけりしもおのゝかく

みえまてはしめてあひみまとおのゝ名八のねてまし

なひしとてよろこひちもののふくらふさまよめき人

此上ハけていよあつかふお爲御爲の緣やちかゝやしてそれ

かゝみふのこれしもの世なしやと思ひなれハあらかき

れし出ともに草稿なをあれとそのゝとのあつ

かりふかくて家をたゝ畫像のみ残しかとても

ますみせなからいてもこゝのしかゝちつきあた

ねとめくらもちもてるまゝに
あくのうてかりまも君らとはなせ八橋が園八あれなきらさま（さき）
岩国のかしきの河に名もたくふことはの花八せきされ流く
なとくちれ茅きぬ
八日きこよく声はれぬ道八とく船まてのほるゆく酒
くら流くらたくる読まも
船うけて淀の川を越けはわくろ流ゆく八あらしとよ（おもふ）
さうまの宮まの山八ゝみてもやらのからぬ時おりなり
まよくとらかてらまの山八こまの山そうかれぬやまのねさくまて（かなゝ）
糸うけてよその川せ越枝は八ひらさく虫のなくきこゆれなり

日比の雨ふりてく水まさりて きのまのくなくおそろしき
まてられ八船のあしはらゆの流れ橋本のあたりにようやく
くらし移て月あらはれきす
くまもれくみちてきよの河水ふまさくたつのきて月越てきみれ
八幡山まう社あらしみなみなつら月越の都は川よとの川船
夜時はらり伏見に流きてやよる
九日とくたちて竹田の京越ゆく
なきこやる袖らのね越名ふめて竹田の泉よけ八きくまか
えくまてみやこの東に山入れ八たらまちのまちつききら
さわられせくあちて東山枝のかつらぬ名越入ぬるゝされしき

あるのうつ師乃さんあつまりくわい絵ひしに
さまさまとありてえまきひろかさかへし
くちえーしきのやうくうきたるあて筆にかく
ねひ乃絵ひし書物をたとこしまりやり
きんかとれみまとてみきる人々ねときんくり
楼上ざきめ折りもすあさらしく又へるのき
ささすれハ大田蜀山とおさきてきくく小本り

談雨画

跋

[illegible]

發行書肆

江戸日本橋通一丁目	須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同　芝神明前	岡田屋嘉七
同　日本橋通二丁目	須原屋新兵衛
同　淺草茅町二丁目	須原屋伊八
同　兩國横山町三丁目	和泉屋金右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町	河内屋和助
同　心齋橋通博勞町	河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町	秋田屋太右衛門
京都二條通衣之棚角	風月庄左衛門
同　數屋町通姉小路上ル	俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目	永樂屋東四郎